



僕の値段

千秋

寒い。自宅のマンションのドアは別世界に繋がっているのではないか。靴を履いて1歩踏み出せば、冷たい風が顔にぶち当たる。家の中のぬくもりは風とともに、どこか遠くへ飛ばされてしまった。冬休み前のテストが迫った12月半ば。僕は、いつも通り、大学に向かう。今日は2限からの授業だ。満員電車を避けられるので、電車内では、ゆっくり座って携帯ゲームが出来るぞ。僕は肩掛けバッグのチャックを少し開けて、中を確認した。クマのキャラクターのついたストラップは、ちゃんと中に入っている。僕は歩きながら、ほっと息をつく。登校前に何かを忘れていないか、確認する癖は中学生の頃から抜けない。疲れる癖だが、忘れ物をするよりは良いかもしれない。大学へは自宅から一時間ほど。電車の乗り換えが少し面倒くさいが、遠くもなく、近くもない距離だと思う。いつもの青いラインの入った電車を待つ。僕が好きなのはトイレが設置されている車両だ。腹が痛くなった時の地獄に、いつでも対処出来る。この時間は電車を待つ人もポツポツとしかいない。僕は足踏みをして冷えた体を動かした。

「1番線に津田沼行きの電車が参ります。お乗りの方は一……。」

駅員さんの声に目を上げる。僕は左側を見つめた。ホームいっぱい大きな音を響かせて、電車が迫ってくる。いっそう、風が強く吹いて、僕の髪が舞い上がった。眉根をよせ、すぐに髪の毛をガードする。ささっと髪に指を通しながら電車に乗り込んだ。マスクをしている着膨れたオバさんの隣のシートが広く開いている。そそくさと席を確保すると、僕は携帯を取り出した。ゲームにログインして、アイテムを貰うのだ。毎日ログインしないとレアアイテムは手に入らない。ゆらゆらと揺られながら2つ目の駅で降りる。そこから電車を乗り換えて、また2駅。大学のある駅は僕の家より少し大きいくらいで、JRの電車のみが通っている。つらつらと歩き、大学の駅の改札を出て、大学付近の小道に出ると、学校へ向かう生徒達の列が見えてきた。ぱさついた栗毛の女子生徒達、ダウンジャケットを着た眼鏡の男子生徒、パッチリとした目（マスクラたっぷり、ひじきのような睫毛）の背の高い女子生徒、ファンション雑誌に載っていそうな顔立ちで細身のパンツを履いた男子生徒。大きな手提げ袋を持って歩く先生達の姿も見える。定食屋の側を通り、花屋の前を歩く。店先にはポインセチアが、いくつか置いてあった。花屋の側の小さな薬局を抜ければ、大学につく。

「ゆうちゃん。」

僕の左肩を誰かが叩いた。振り向くと、見慣れた笑顔が、そこにある。長髪でヒゲのくせに女顔の友人。

「おお、保ちゃん。おはよう。」

僕は保ちゃんと並んで歩いた。保ちゃんは、ゆっくりと歩くので、僕もそれに合わせる。

「ゆうちゃん、今日の英文法の授業、予習してきた？就活に集中してるから、宿題とか予習とか忘れちゃうよな。早く教室行って、やっておこなきゃ。」

「予習はしたよ。就活ねえ。何か面倒臭いな。エントリーシートの志望動機とか、わかんねえし。」

大学を卒業する前に死ねたらいいのに、という言葉が飲み込み、僕は溜め息をついた。死んでし

まえば楽なものなのに、と最近よく思う。僕は乾いた枯れ葉を探して、踏みつけた。パキリ。

「面倒くさくても、やらなきゃだからなあ。志望動機は確かに辛い。お金が欲しいから、ってのが本音でしょう、志望動機なんて。結局さ、みんな、雇ってくれるなら何でも良いと思っている部分あるんじゃない？」

八重歯を見せて、保ちゃんは、へへと笑った。笑うと目尻が、とろりとなるのが彼の特徴だ。

白い階段をのぼり、1番手前の教室に、一緒に入る。これが僕の日常。

何故こんなことに

自宅の前、僕はポケットから鈴のついた鍵を取り出し、扉に、それを突き立てた。えぐるように、時計周りに、ひねる。ガチャンという断末魔が、ぬくぬくとした我が家に帰ってきたことを知らせてくれる。

「ただいま。」

静寂の中、僕の声が暗闇に溶け込む。キッチンも玄関も真っ暗なままで、足下が全く見えない。体をひねり、玄関に、つま先を向けた格好で靴を脱ぐ。他の靴を、いくつか蹴飛ばした。いつもなら夕飯の匂いが、漂ってくるはず。今日はキッチンを抜けた居間の方からチカチカと点滅する灯りだけが見える。向かってみると、テレビの前で母が正座をしている姿が目に入った。目を見開いて、テレビの画面を凝視している。グレーに陰った部屋にオレンジ色の夕日だけが明るく差し込んでいた。

「世界中で今、お金というものをなくそう、といった運動をしているグループがいる、ということは、ここ最近のニュースでも取り上げられていたことですが、まさか、こういったことが今日起こるとは誰が思ったことでしょうか。」

短髪のリポーターがマイクを握りしめ、僕の見覚えのある銀行の前に立っている。自宅に1番近い駅の側にある銀行だ。銀行の隣のコンビニには週に何度か行く。

「藤崎リポーター、そちらの現場の様子は、いかがですか？」

「はい、現場は、まだ殺伐としており、緊張状態が警察とグループの間で続いています。グループの中には日本人だけでなく、外国人もちらほらと混じっているように見えます。」

【反貨幣制度グループ、銀行襲撃】というテロップが画面の右腕に出ていた。テレビによると、こうだ。今日、2020年の12月15日、一般市民と何人かの外国人が銀行を襲った。グループのメンバー達が言うには、世界をコントロールしているのは、お金であり、戦争もまた金儲けのために引き起こされ、自分たちは、お金の依存で生きているが故に、一部の支配層が作ったシステムから逃れられない、とのことだ。僕は最近、巷で噂になっている陰謀論のことが頭に浮かんだ。インターネットのあらゆるサイトで、そのことについて語られている。テレビに映っている銀行は僕の家近くの銀行だが、"今この瞬間、日本中の、いや、世界中の銀行が襲われている"とリポーターは話している。

「お金が無くなる日というのは、果たして、やってくるのでしょうか。今、人質は解放されつつあるようです。ん？あ！」

テレビの画面が一瞬光り、リポーターが小さく声をあげた。

「今、何か爆発物のようなものが爆発した模様です。ここからは、よく見えませんが、煙が上がっています。あ！」

再び、明るい光が画面の向こうで瞬いて、何かが破裂する音がした。僕の横で母が、はっと息を飲む。

「危ない！離れて！銀行が破裂した！」

すっかり日が暮れて暗くなった部屋にリポーターの声だけが響く。

今日から、どうしたら良いの？

世界中の銀行が爆破され、僕たちの貯金は紙くずどころか、燃えくずになった。どうしたら良いのか見当もつかないが、とにかく笑いが込み上げてくる。こんなことって、あるのだろうか。

「あんた、勇也は今いくら持ってるの？お母さん、昨日買い物してきたから財布の中は五千円も残ってないの。お金使えるのかな？」

僕は黒のシンプルな長財布の中身を開いてみた。野口さんのモサモサした頭が1つ、2つ、3つ。

「僕は三千円しか持ってない。バイト代も、まだ入ってないし。お金は使えるんじゃない？」

「困ったわね。今日は大学は？授業あるの？お金は持っていくのよ。それにしても、お金が無くなったら、どうなるのかしら・・・。」

ふう、と母は下を向いて、顔を手のひらで覆った。節くれ立った両手が、いつもよりも小さく見える。

「大学は行くよ。授業は一応あるみたいだから・・・。お金は少ししかないけど、うん・・・。お金が無くなったら・・・どうだろうね。」

苦笑しながら、ふと窓の外を見ると、黒い空が、どこまでも広がっていた。僕は人差し指で少しだけ、頭をかいてから、ドアに向かう。指先も足先も冷たかった。

今日も風が強い。伸ばしかけの髪の毛を撫で付けても、自然のドライヤーには勝てそうも無い。昨日の夜、帰ってきた父さんは

「何処の銀行も、いや、全部の銀行が、どうかは分からないが、爆破されて金庫も人も吹っ飛んだそうだ。Y銀行は、おろせないだろう。このへんの支店は全部やられた。」

と言った。僕のバイト代も父さんの給料も、いつもならY銀行に振り込まれることになっている。僕はS銀行の口座も持っているが、そっちは放置気味で、何も入っていない。母さんの口座のあるU銀行も、あらかた、このへんの支店は爆破されてしまった。つまり、僕の家族は窮地に立たされている、ということだ。僕は、とても死にたい気持ちになった。しかしながら死ぬのは怖い。どちらにしろ、このままでは飢え死にするか、自殺するか（一家心中かも？）になるかもしれない。苦笑しながら僕は歩き続ける。街の中に溢れるクリスマスのフワフワした白い飾りやライトを見て、溜め息をついた。気分はマッチ売りの少女。家から遠く離れる前にバッグのチャックを少し開けて、中を確認する。マッチは忘れてきたようだ。青い空を見上げながら歩き出した僕の背中にカラスが、かあと一声鳴く。サラリーマンの真っすぐな背中、携帯を見つめて歩く猫背な女子高生、杖の先を見つめながら、お辞儀するように歩くおばあちゃん。その中に、ポツポツと、鼻息荒くコンビニへ向かっていく人や、集まって何やら話しているオバちゃんの姿がある。歩きながら、ドキドキする心臓の鼓動を感じる。みんな、どうなるのだろうか。バス停へと向かう足を早めながら、通りを歩く人々を追い抜いていく。歩く速度は、ドンドン早くなる。バス停の列に並び、僕は息を整えた。白い息を吐くごとに、切り裂くような空気が喉の奥に入り込んで、思わず、咽せこむ。目を潤ませながら、顔をあげて、ひとつ、息を吐いた。目の前を、白い吐息が包み込む。その向こうで、白や黒、灰色の自動車が、灰色の道路を行き交っていた。ゆ

っくりと、右側から、クリーム色をしたバスがやってくる。青色の車の後ろから、他の車に歩調をあわせて。赤くなった指先をこすり、僕はバッグの中から定期入れを取り出した。黒い定期入れの中のプリペイドカードを見つめる。3日前に、駅でチャージしたカードだ。この中には、お金と同じものが入っている。現物のお金を持っていないのに、持っている気分させる。そして、お金が無かったら、バスにも電車にも乗れない。

世界を繋いでいたもの

お金が無かったら、どうしよう。僕は、そう考えていた。お金にコントロールされている。確かに、その通りかもしれない。お金が無かったら何も出来ない。今は、まだ良い。まだ、銀号が破壊された後でも、今はまだ、お金が使われているし、お金を使ってバスにも電車にも乗ることが出来た。でも、もし出来なくなったら？僕には何の力があるのだろうか？家族を支える力も無い。

お金は力だったのだろうか。だから、みんなをコントロールしていたのだろうか。あのグループが言うように、お金を手放せば、コントロールから抜け出せるのだろうか。きっと、そうだ。だって僕は、こんなにも苦しい。だけど怖い。今まで、お金と生きてきた。それが無くなるなんて耐えられないかもしれない。けれども、そんな世界も良いかもしれないと思う。お金が無かったら楽だ。楽なのに、どうして僕は手放せないのだろうか。怖い！怖いのは絶対楽じゃない！

これから、どうしよう。そうだ、まだ様子を見よう。少しは財布の中に、お金もあるし。食べ物も家に少しは、あるだろう。けれども、お金が無くなった時のことも考えなければ。いや、両親が何とかするだろう。僕は流れに任せて生きていこう。大丈夫、死にゃあしない。国が何とかしてくれるだろう。いや、もしかしたら、この発想が俗にいう「コントロール」の中に入っているのかもしれない。そもそも、お金が無ければ生きていけないのだったっけ？

4時限目の授業が終わった後の教室、僕と保ちゃんは、一緒にお昼ごはんを食べた。

「大学は結構普通だったね、保ちゃん。どうなるのかな〜、とも思ったけど、ネットの掲示板見たら、休みじゃないって書いてあったし。」

保ちゃんはアルミホイルに包んだ、おむすびを頬張りながら、うんうんと頷いた。鎖骨まで届く長い長髪が揺れる。今日もニコニコ顔だ。

「なんか、来なくなった先生もいるって話だけどね、やっぱり、お金が貰えないかもしれない、ってなっても一応は来る先生が大半だよ。だから大学は何となく大丈夫だ。」

「何で来ない先生も、いるんだろう。お金が貰えないかもしれないから、ってこと？」

うーん、保ちゃんは首をかしげ、ペットボトルの麦茶を1口飲んだ。

「お金が貰えない・・・か、どうかは分からないよ。日本銀行は無事だったし、いきなり、お金をなくすっていうのも無理があるでしょう。何人かの先生は本気で世界から、お金を無くしたい、って言って、今日来なかったらしいけど。どうするんだろうね、生活。」

生活、という言葉は僕の心に大ダメージを与える。

「日本銀行無事だったんだ・・・。先生達スゴいね・・・。僕は出来ないと思う。生活ってリアルだよ。生活って。」

僕は小さな弁当箱の中のブロッコリーを箸で、つついた。

「うーん、でも俺は、ちょっと興味ある。銀行を襲撃までは、したくないけど、お金っていう制度から抜け出すために色々やるのは、ありだな。だって、お金使う生活やめたいもん。出来ることなら畑でも耕して、のんびり暮らしたいよ。必要な物は物々交換してさ、お互いに必要な物は助け合って補うんだ。縄文時代みたいな感じでさ！良いでしょ？俺、やろうかな。一生お金で、やきもきするの嫌だ。ゆうちゃんも、やらない？何か就職活動なんて、ばからしいし。嘘ついてさ、就職してさ、結局何になるってんだよ！生活ってさ、楽しくなきゃダメでしょ？何の為に生きてるの？俺は楽しく生きたい！」

保ちゃんは両手の拳を握りしめ、両腕をあげて、反り返って声をあげた。

「でも、銀行を襲撃するまでってスゴいよな。僕も、お金使う生活やめたいな・・・畑かあ。別に田舎で暮らしたりは、したくないな。必要な物をブツブツ交換するのは、うん、ありだ。縄文時代ねえ、どんな暮らしをしてたんだろ？ちょっと気になってきた。良いかもしれない。保ちゃん、やってみてよ。僕は、やらない。保ちゃんが楽しそうだったら、やるよ。それまで頑張る。楽しい感じになったら、僕にも、やらせて。」

ふっふっ、と僕は笑みをこぼした。ブロッコリーを口にに入れる。

「僕は就職活動でも、してるよ。嘘も方便だ。この世界はさ、苦しいことだらけだよ。何の為に生きているかなんて分からない。そりゃ、僕も楽しくいきたいけれどもね。でもさ、そんなこと、出来っこない・・・かもしれないし。」

ゆうちゃん、と言って保ちゃんは腕を組み、長く息を吐いた。

「やりたくないなら、やらない方がいい。たださ、あまりにもネガティブじゃない？」

保ちゃんは眉根を寄せ、やれやれといった顔つきをした。どんな表情をしても、様になるのが羨ましい。

「人が人と生きるのに、お金を必要としない時代も、あったわけでしょ？それが助け合い精神で生きていた時代なんじゃない？んー、まあ今も助け合いは、あるけどさあ。分かったよ、俺やるよ。世界に貢献するよ。今、別に夢がある訳じゃないんだけど、人の為になることが出来るって良いよね。それって楽しいじゃん！生きてるって感じすると思う！」

僕は何も言えなくなってしまった。

僕を置いて、まわっていく世界

お金を流通させるために、円が沢山刷られると、輸入食品の値段が上がるようになった。しかしながら、このお金革命は海外の至る所でも起こっている。勿論、アメリカでも銀行破壊やデモが起こっていて、日本より過激に見えるが、状況は似たようなものだ。アメリカでも、ドルが刷られている。今は、どこの国も、貨幣を流通させるために、お金を刷るしかないようだ。そして、ドルは少しだけ高くなった。それでも暴動は続いている。テレビのニュースで観た感じだと、アメリカでは、ちょっとした内戦が起こっているように見えた。けれどもアメリカは国債を発行して、ドルを生み出し続けている。市民と銀行・政府の、いたちごっこだ。お金の動向が不安定なので、金を買う人も増えつつある、と聞く。

あの銀行の事件から5日後、状況は少しだけ変わってきた。お金が未だに、おろせない状態なので、手持ちのお金が底をついてしまった人たちが何人か出てたのだ。僕たち家族も、もうそろそろ無一文になりそうな状態である。しかしながら、食べ物を買わない訳には、いかない。母に頼まれ、僕はスーパーに、おつかいに行った。最後の1袋のもやしを、かごに入れ、ビールの横を名残惜しい気持ちで通り過ぎる。もやし、納豆、食パン・・・僕はポケットの中に手を入れ、千円札があることを確認する。その時だった。

「今、お金が無いんです。どうか、これで、お願いします。ダイコンの葉っぱだけでも良いのです、わけて頂けませんか？」

「おばあちゃん、ちょっと待っててね。店長に聞いてくるから。」

青いキャップ帽を真っすぐに被った店員の、お兄さんが、お婆さんに背を向け、走っていく。長い足が、開き扉の向こうに消えた。じっ、と僕は、お婆さんの後ろ側に立ち、目を泳がせた。店長は、どうするのだろう。ダイコンの葉っぱくらいはくれるだろうか。でも、それだけで足りるのかな？正直言って、僕もダイコンの葉っぱが少し欲しいぞ。

「ダイコンの葉っぱですか？」

白髪混じりで青いユニフォームを着た、おじさんが、お婆さんに歩み寄りながら言った。

「はい、はい。コレくらいしか無いのですが、お金がありません。食べるものも底をつきましてね。死に損ないの婆ですが、腹は減るのです。どうか、わけて頂けませんか？」

お婆さんの手には何やらピンクや赤、オレンジ色の糸で出来た丸いものが乗っていた。

「縫いぐるみ、かな？」

「編みぐるみというやつですよ、ほほほ。」

ダイコンの葉っぱを一袋分持って、さっきの店員の、お兄さんが、やってきた。

「持ってきましたよー。」

「ご苦労様。じゃ、お婆ちゃん、コレ持って行って良いからね。ご家族は他にいないの？1人で大丈夫？」

ありがとうございます、ありがとうございますと手を合わせながら、お婆ちゃんはダイコンの葉っぱを受け取った。

「お腹が減って仕方が無かったですよ、ありがとうございます。家族は私1人。今まで1人で

、やってきたのですよ。それでも、寂しいですなあ。仕方が無いことですが。」

眉根を下げ、店長と店員は目を合わせる。口を開いたのは、うっすらとヒゲの生えた店長だ。

「お婆ちゃん、編みぐるみ、ありがとう。これだったらダイコンの葉っぱ以外にも、あげなきやね。何が良いかな？お米は、あるかな？」

「良いんですかい？ほんだら、まんじゅうを1つ下さい。爺さんも腹が減っているだろうから、仏壇に飾るからねえ。何から何まで、ありがとうございます。」

店員が店長の指示を受け、まんじゅうを取りにいった。僕は、ほっとした気持ちで店員を見守る。こんな時でも、お爺さんのことを想っているんだ。どうか、お爺さん、お婆さんを守ってあげて下さい。僕はレジに向かって歩き出す。パタパタと足音をたてながら、すれ違った店員の手には、まんじゅうが2つと、米が1袋ぶら下がっていた。

おじさんと僕

ポケットの中の小銭を握りながら、僕は川原を歩いた。買い物袋が前に後ろに揺れる。冬の日差しは、ぬくもりいっぱいだ。土手いっぱい太陽の光が差し込み、水面をキラキラさせている。ぽちゃん、と、水の跳ねる音が後ろから聞こえて、思わず僕は振り返った。髪長い男の人が、河原の石を拾っている。少し握って、手に馴染むか確認し・・・腰をひねって投げた。舞い上がった髪が、おじさんの顔を、ふわりと覆う。とんとんとんとんとん・・・ぽちゃん。

「よおーし。」

川に背を向け、おじさんはガッツポーズを取った。風が枯れ草と僕たちの髪を撫でる。耳に心地よい音が響いて気持ちがいい。ポケットに手を入れてから、おじさんは土手を振り返り、僕を見つけた。にこっと笑い、手を振る。

「何してるんだー。お前も、やってみたいかー。」

突然話しかけられて、僕は目を泳がせてしまった。髪を撫で付ける。歩いて行って、上目遣いで覗くと、おじさんは皺だらけの顔を、さらに、くしゃくしゃにして顔いっぱい笑う。

「一緒にやろう。たまにはよ、こうして子供みたいになって、色んなこと忘れるんだよ。みんな、いっぱいいっぱいかもしれないが、生き方なんて人それぞれだ。」

おじさんは足下の石を広い、僕に手渡した。滑らかで、ツルツルとした石だった。

「お兄ちゃん、どこからきたの？無口だねえ。話すのは嫌かい？」

「あ、いや・・・違うんです。ちょっと突然で。話せますっ！」

買い物袋を、わきに置き、僕は両手で石を握る。えいや、っと腰をひねって石を飛ばした。

「おお、飛ぶねえ。」

ははは、と、おじさんは笑う。僕は、ふううと息をついた。

「久しぶりです、こんなこと。おじさんは、よく、ここに来るんですか？そういえば何度か見たような気がします。」

「そうだなあ、おじさんは、ここに住んでる、のかな。ここにしか居場所ないんだよね。」
遠くを見て言う、寂しげな横顔を見ながら、僕は、もう1つ石を拾う。

「ここにしか居場所がない、ですか。」

「うん。ここが家だよ。俺はね、大分前から、ここに住んでる。」

言うと、おじさんは軽く頭をかいた。べたりとして元気のない白髪まじりの長髪が揺れる。

「おじさんはホームレスなの？何だか元気なホームレスだね。」

「君、言うねえ。そうだ、ホームレスだね。地球が俺の家だよ。」

「どうやって生活しているの？地球が、おじさんの家なら、おじさんは神様かもね。」

「そうだ。みんな神様だ。おっと。」

声をあげた、おじさんの目線の先に、もう1人、歩いてくる、おじさんが見える。汚れたキャップ帽、カーキのジャンパーと穴の開いたジーンズ。ジーンズのスソに泥がついていた。

「ただいま、茂治。何やってるんだ？坊ちゃん誰だ？」

僕はもう二十歳は過ぎているのだが、彼には坊ちゃんに見えるらしい。

「おお、順次。今な、この、お兄ちゃんと遊んでたんだよ。名前は知らない。順次、今日の夕飯あったか？」

「夕飯な。安くなるのを待って買った握り飯があるよ。ほら、どれにする？」

もう1人の、おじさん、順次さんはジャンパーのポケットに右手を突っ込み、おにぎりを2つ取り出した。包装のビニールを剥がす時に少しコツがいる三角おにぎりだ。茂治さん、石を投げていた方の、おじさん、は鮭のおにぎりを選んだ。

「ありがとうね。いつも本当に助かるよ。じゃ、夕飯作ろうか。お兄ちゃんも食ってく？」

「え？あのー、僕が頂いちゃっても良いんですか？それは、ちょっと大変なんじゃ……。」

「ああ、気にしてんのか？ホームレスだからね。でもね、人は人らしく生きるもんだ。おじさん達はね、心は貧乏じゃないんだよ。助け合う時は助け合う。お金を手に入れるのは確かに大変だよ。ただね、お金があったからといって幸せな訳じゃないんだよ。まあ、たいていの人もさ、お金で幸せにならないって言うよね。でもね、やっぱり、お金は大切って言うだろ？それは、それで良いんだけどさ、お金を手に入れる為に……最低限の生活？みたいなのを保つために必死だよな。」

言って、茂治おじさんは何度か瞬きをし、僕を見た。

「来いよ。ゆっくりしていけばいい。」

ぺこりと頭を下げて、ついていく。橋の下まで行くと、ビニールシートとダンボール、やかん等が地面に置かれているのが目に入った。

「おじさん、本当に良いんですか？」

ドキドキという鼓動が耳に響く。やかんの横にある凹んだ鍋が不安をあおった。

「良いよ。握り飯は2人分しかないけど、味噌汁はあるし。お茶もわかせるよ。」

「あ、はい。あの……おにぎりと味噌汁だけで足りるんですか？」

夕飯だったら、ゴハンと味噌汁、おかずは必要だろう。

「うーん、その日によるけど。余裕があるかにも、よるな。これは、お金の問題だね！」

ははは、と笑って、インスタントの味噌汁を、茂治おじさんは側にあつたリュックの中から取り出した。

「そこの器、3つ取ってくれる、お兄ちゃん。」

はい、と小さな声で僕は答える。後ろでは順次おじさんが、やかんで湯を沸かしていた。

「坊ちゃん、最近は何だか物騒らしいな。ここにはテレビがないから、視覚的な情報は入ってこないけどさ、何でも、お金を放棄する運動？だか何だかが起こってるんだって？まー、大それたことするね。」

「僕、銀行が破壊されてるの見ましたよ、テレビで。きっと、世界には色んなこと考えている人が、いるんです。お金がなくなったら、良い世の中になるのか、僕には分からない。」

色んな人がいて、色んな生き方がある、と言って茂治おじさんが僕に味噌汁の入った器を差し出した。顔を暖かい湯気が覆う。木で作られた器は木目が優しく、両手で持っても熱くなかった。

「お金があるか、ないかじゃないんだ。自分の意識が全てだよ。結局のところ、良いも悪いもな

いんだ。俺達は単に思い込んでいるだけだよ。」

「思い込んでいるだけ？」

茂治おじさんは、ゆっくりと味噌汁をすすった。

「そう。自分で考えたことを、世界に投影しているんだ。」

僕は、うーんと考え込んだ。

「坊ちゃん。若いんだから、もっと色々やっごらん。お金は、あんたを制限しないんだよ。制限するのは自分だけだ。安定した生活っていうのは嘘だよ。世界はな、変化するもんだ。そうして均衡を取るんだよ。それから変化しているものは幻想だ。本当に大事なものは変わらないんだよ。」

「色々やる、って言っても、それは本当に役に立つのでしょうか？確かに、僕を制限しているのは僕だけだ。だって、僕を動かしているのは僕自身なんだから。僕は安定した生活を求めています。変化するのが怖いんです。僕は均衡を取るのが怖いのか？でも変化しているなら、これは幻想なの？大事なものが何でしょう。僕は自分自身でも何を大事にしてきたか分かりません。」

殻になった器を僕は見つめた。

「はは、お兄ちゃんは自分を制限しているのは自分だけだ、って言ったね。だったら、どう自分を動かせば良いのか、出来るのは自分だけさ。みんなが安定を目指しているからって自分も、そこを目指さなくたって良い。変化するの怖いものだよ。それが本当の均衡だって知らないんだよ。だって、坊ちゃんは、それが幻想だって分からないんだろう？大事なものは真実さ。真実は、いつも変わらない。この世界は俺達には分からないものだ。」

「そうですね・・・自分次第なんだ。」

「万事塞翁が馬さ。あたたかい家に住んで、毎日3食飯を食う。それが必要だと思うから、お金に執着する。けどね、それを、やめちまった時。はは、これが面白いもので、自分が実は、それがなくても生きていけることに気づくんだ。」

辺りが暗くなり、かなり冷え込んできた。僕は、おじさん達と別れて家路につく。買い物袋が前後に揺れた。味噌汁の味を思い出しながら、揺れる買い物袋を僕は見つめる。あたたかい気持ちと、胸が詰まるような気持ちが押し寄せた。

Friends

晴れた日曜日の朝だった。お金がないこと以外には何の問題もない。しかし、暴動は少しずつ激化している。いたるところ、警察で、いっぱいだ。青い車の中、僕は保ちゃんと一緒にいる。「ゆうちゃん、もう少しで着くから。それにしても大丈夫なの？もう全財産なくなっちゃったんでしょ？」

青に変わった信号を右に曲がる。青々とした草木と大地の広がる畑が見えてきた。

「いや、大丈夫じゃないよ。だからこうして保ちゃんの車に乗ってるんだものね。もう電車乗れないもん。」

もう学校にも行けない。

「そうだよね・・・ごめんね、変なこと聞いたかな。でもね、今日、みんなに頼んであるから。一緒に畑始めるんだろ？」

言って車を止める。がくり、とシートが揺れた。

「ありがとうね。いきなりさ。なんか僕も始めたくなっちゃって。」

ただ食料がないから畑を手伝い始めたとは思って欲しくない。良い世の中にしていきたい。一歩踏み出すんだ。

「大丈夫だよ。でも、いきなり、どうしたの？何かあったのかな？」

「実はね、この前、ホームレスの人たちに会ったんだ。で、どうしても、やらなきゃな、って。世界を変えられるのは自分自身なんだ。」

保ちゃんはハンドルに両手を乗せ、じっと僕を見た。今日は笑っていなくて、真っすぐな目が痛い。

「へえ、やっと、そう思い始めたんだ。そうだよ、世界を変えられるのは自分だ。待ってたよ、ゆうちゃんが、そう言うの。何だって1人で、やったら寂しいもの。仲間がいて、楽しい世界が広がる。」

ゆうちゃん言葉に、ほっと笑みが、こぼれる。笑い方を忘れた僕の顔は少しだけ強ばっていた。そして、保ちゃんも一緒に笑う。見慣れた、あの笑顔。

「行こうか。」

僕は畑というものを初めて見た。何もない。

「ほら」

ぐい、と保ちゃんが鍬を差し出す。小学生の頃に持った箒の柄に似た感覚。でも、とても重い。

「初めて持ったでしょ。みんなが来る前に耕して。今、冬だから、耕すしかないの。」

「畑と一緒に耕している人って、どんな人？」

「普通の人だよ。おじちゃん、おばちゃん。」

ドキドキと高鳴る心臓を僕は左手で抑えた。おじちゃん、おばちゃんに何て言えば良いかな。今日から手伝います？気に入られると良いな・・・。

「安心してよ。僕から紹介するから。土かたいよ。早くやろ。」

要領が良くて、誰とでも仲良くできて、笑顔がチャームポイント。僕が女だったら、保ちゃんに

惚れるかもしれない。湿った土を鋤の先で、かりかりと、こする。大きなフォークみたいな鋤。広い畑の中で、僕は自分が1本の細長い木になったように感じた。

「早く鋤で耕せって。」

隣で保ちゃんが、ふっと笑う。

おじちゃん、おばちゃんは、ふくよかで、お喋りな人たちだった。畑のことを教えてもらった後に飲む麦茶が美味しい。

「ゆう君は、どうしてまた畑を始めたの？若いのに珍しいわねえ。ああ、けれども、最近では、こういうの流行ってるんだっけ？」

「僕、自分の好きなこと、やって、他人にも何か与えられるような生き方をしたいんです。最近の人が、どうかは保ちゃんくらいしか絡まないから分からないけれど、きっと、みんな、それぞれ精一杯生きてる。僕、お金ないんです。けど、気持ちは、あるんだ。」

「おじちゃんは、ゆう君みたいな人が、いてくれて嬉しいのう。お金があったって人は生きていけんよ。気持ちが、なきやあなあ。必死に働いている人がいる。幸せに生きるために稼ぐのに、必死になっている時点で、どこか幸せじゃあないわのう。」

おじちゃんが麦茶を1口すする。

「おじちゃんも、お金を手放した生き方がしたいのですか？今、楽しいですか？」

「楽しいさ。お金は持っているから辛いんだよ。もっと欲しくなるだろう。」

「お金がない方が辛くないですか？欲しいと思うものを手に入れるのはダメですか？」

「手に入れればいいさ。けど本当に欲しいものは真実じゃあなのう。」

「真実って何でしょうか・・・前に友達も同じようなことを言っていたんです。」

ぽん、と肩に手を置かれ、振り返ると保ちゃんが笑っていた。

「やりたいことを、やればいいんだよ。」

「保ちゃんみたいに？」

「俺は俺の、やり方でしかできない。自分の、やり方は自分で見つけな。」

全てが自分次第・・・。

「まどろっこしいわねえ。ゆうちゃんはもう自分の、やりたいこと分かってるじゃないの。自分の好きなことで他人を助けたいのでしょ？あとは好きなことだけ見つけなさい。畑が好きなら畑を耕せば良いじゃないの。」

「おばちゃん・・・そうだよ。畑を耕すことは自分の好きなことだと思う。それに誰かを助けられる。お金がなくなっても、やっていけるかも。」

「誰でもものう。助け合って生きてるんじゃないわい。全部自分で、やろうとするな。お互い様精神じゃ。」

僕は茂治おじさんと順次おじさんを思い出した。2人で協力して一緒に生きている。

「お金よりも助け合って生きてくれる仲間が必要ってこと？確かに僕は、いつも1人で、やっているというか、助けてもらう、という考えが、なかったように思います。誰かを助けてあげる、という考えも、なかった。そして僕は・・・孤独だった。」

さあ、と風が吹いて、一瞬の静寂が訪れる。12月の風は冷たく、容赦がない。

「あのさあ、ゆうちゃん。俺は、ゆうちゃんが1人だなんて思ったことないよ。いつも一緒にいたじゃないか。忘れたのか？それに、ゆうちゃんは、いつも俺のことを助けてくれたよ。俺は孤

独じゃなかった。俺が孤独じゃないなら、一緒にいる、ゆうちゃんだって孤独なはず、ないだろ。」

顔をゆがめながら、言った保ちゃんは僕を目を真っすぐに見ていた。

僕は、いくら？

お金って何かな。僕は何を求めていたのだろう。お金は欲しい物を与えてくれる？そうだ、確かにそうだ。けれども僕が欲しい物は、お金でなくて、お金で交換した物なのだろう。それを手に入れるには、お金しかないの？それは違うと思う。タダで貰うことだってある。昔は、お金なんて無かったはずだ。それって助け合って生きていたってことだ。

今の時代は助け合っていない？そんなことはない。僕には助けてくれる友達がいる。とすると、本当に生きる為に必要だったのは、お金ではない。だって、お金がない時代でも、みんな生きていたのだから。

みんな心のどこかで、ホームレスやニート、障害者を価値がないと思っていた部分があると思う。なんで？「普通の人」じゃないから？「普通の人」って何？僕は普通の人だったのかな。

普通の人なんて嘘だ。

普通なんて、なかった。全部そう思っているだけ。お金を稼げる人が、えらいとか、何か大きなことをすればすごいとか。お金で人や物の価値を決めていた部分で、あると思う。それって・・・へんだな。誰もが平等って教わったはずなのに、そうじゃないみたい。でも、平等っていうのも嘘だな。全部そう思っているだけ。僕も保ちゃんも茂治おじさんも順次おじさんも、畑の、おじちゃんおばちゃんも同じ。僕が何も持っていなくても僕は同じ。変わらないんだ。助けてくれる人たちが側にいて。何も持っていなくても僕は、みんなを助ける。

そもそも僕は何故、価値を必要としていた？誰かに必要とされたかったのだろうか？それならもう・・・僕は必要とされている。そして僕は、みんなを必要としている。けれどもきつと、必要とされていても、されていなくても僕の価値なんて変わらない。価値なんて最初から、ないのだから。ただ、それが必要だと思っただけ。価値なんて考えは頭の中に浮かぶ雲のようなもので、多くのものを覆い隠してしまうんだ。

お金の値段は人や物の価値。そんなものは、ないんだ。僕の値段はゼロ円。お金を貰わなくたって、僕は幸せになれるさ。僕のために、お金を支払わなくたって、僕は人を愛するさ。助けることも、できる。

今まで何で、こんなに、お金に、こだわってきたのだろう。価値に、こだわってきたのだろう。僕は、やるぞ。自分の好きなことを、やって、みんなが好きなことを、やって、世界を平和にするんだ。僕の気持ちは平和だ。あたたかさも、僕の心から生まれる。

ありがとう。みんなが、いるおかげで僕は変われる。僕は新しくなる。それさえも、ただの夢のような幻想だと知りながらも、この胸の高鳴りは嘘じゃない。みんな救われるんだ。誰も僕たちを縛り付けることは、できない。自分以外は、できないって教えてもらった。けど僕は自分で、ちゃんと分かったんだ。真実は、そこにあるって。みんなが豊かだといいな。愛されていると分かってもらえたらいいな。

お母さん

「みなさん、重大発表です。もう、お金は、ありません。」

緑茶の香りのする居間で、父さんが言った。僕と母さんは・・・特に驚きは、しなかった。

「そろそろだと思っていたわ。」

「ああ、もうそろそろだと、僕も思っていた。」

静かな部屋にテレビのニュースの声だけが響いた。僕たちは文無しになった。静かに、父は口を開く。

「父さん、どうしようかなあ。」

「食料も、もうすぐ、なくなるわ。」

僕は、あぐらをかいたまま腕を組む。考えた末に言った。

「あのさ、僕、お金が無くても大丈夫だと思う。僕・・・」

はっは！と父さんは笑いだした。あまりに大きな笑い声に、僕は、きょとんとする。父さんは楽しそうだった。

「なあに言っとるか。家族全員で物乞いにでも、なるんか！お前が何とか、できるんか！」

あはは、と、ただ笑い続ける。

ばああああああああああああああん！

弾けるような音が響いて、父さんの息が止まった。ドキドキという心臓の音が肋骨全体を揺らし、僕の頭は宇宙の果てに、すっとんでしまったようで、何が起こったのか分からない。

「もう耐えられないわ！笑っていないで会社に、ちゃんと、お金の請求しなさいよ！会社側も、お金が入らなくなったって言うけどね、知らないわよ！そんなこと！」

テーブルを激しく叩き、吐き捨てるように言う母を見て、僕も父さんも顎が緩んだ。げんこつが入りそうな大きな口を開けている父さんは瞬きも忘れてしまったようで、飛び出た目がスーパーに陳列している魚の目に、そっくりになっていた。

「私、実家に帰りたい。でも帰れない。お金がないから！」

僕は両手を、ぐっと握りしめる。

「そんなこと・・・ない。助けてくれる人たちは沢山いるんだよ。今みんなと助け合わなくちゃ。」

プチ、と父さんがテレビを消した。かたり、とテーブルにリモコンを静かに置く音が体全体に響く。

「すまなかった。」

絞り出すような父さんの声に僕は胸が痛くなった。何故？悪いことなんて何もしていないのに。

「うわあああああああああ！」

母の泣き叫ぶ声が響く居間では、冬の太陽だけが、かろうじて、ぬくもりの片鱗を保っていた。僕は立ち上がる。ゆっくりと下を向いたまま。顔を上げたらきつと、涙があふれてしまうから。家族の不安は僕には抱えきれない。

「どこに・・・行くの？」

嗚咽を懸命に抑え付けながら母が聞く。

「どこにも行かないよ！」

両手を強くふって、僕は駆け出す。ドアの向こうの風も太陽も、存在していないかのように空虚だ。髪が舞い上がって、おでこが冷たい。コートを忘れたのに、鳥肌もたたないくらいに体が熱かった。うう、と言いながら嗚咽を抑える。周り人影さえ見えない。僕は本当は何ができるんだろう。家族さえ助けられないのに。僕は僕自身さえ助けられない。陽光が立ちすくむ僕の目の前に長い影を作った。

お金がなくても大丈夫だと言ったのは僕だ。だったら、きっと方法は分かっているはずじゃないか？飛び出してきた道をUターンして家へと、僕は向かった。かじかんだ手をジーンズのポケットに入れる。ゆっくりと歩く、この道は、ずっと昔から歩いてきた道。小さい靴で友達と歩いた道。母の手を取り歩いた道。父さんの背中を見ながら歩いた道。そして1人で寂しく歩いた道。

僕の家マンションも、僕を迎え入れてくれるドアも、いつもと変わらず、そこにある。今年は白い、そのドアにクリスマスのリースは、かかっていなかった。そういえば、お店の中でもクリスマスの食べ物は去年に比べて、あまり売っていないようだった。チキンやケーキ、時々見かけるエスカルゴ、ポテトに唐揚げ、それらの材料を仕入れるのも、お店は大変なのだろう。でも僕は、やらなくちゃ。何か。何か。僕に、できることがあるはずだ。

さわやかな風が、マンションのドアを開けると流れてくる。

「どこに行っていたの、ゆう？」

母の真っ赤な目が弱々しく僕を見つめる。おぼろげに歩く姿は、僕の婆ちゃんに、そっくりだった。時が経ったんだ。僕は大人になった。そして両親は僕を置いて去っていく。いつか。

「しばらく家には帰らないから。」

いつの間にか皺の増えた母に向かって、しっかりと、そう言った。胸が熱い。全身が震えている。

「何を言っているの、あんた？帰らないって、どこに行くつもりなの？」

「みんなのところへ行くんだ。友達に食糧も、もらわなきゃ。それから・・・僕は、お金を放棄する運動にさんかしたいと思う。過激なことは、やらないだろうけれど、力に、なりたいんだ。もしかしたら世界が変わるかもしれないでしょ。」

「・・・そうね。」

母さんは下を向いた。僕は玄関の前で立ちすくむ母の横をぬけ、自分の部屋のクローゼットをあさる。トレーナーを何枚かとパンツを何枚か、ジーンズは2枚、引っ張りだした。クローゼットの奥に置かれているリュックも取り出す。それから学校の鞆を手に取り、ペンケースやティッシュを、さっきのリュックに、うつした。4畳くらいの部屋の中、僕は、ここにあるものの全てを知り尽くしている。肺いっぱい匂いを吸い込むと、埃っぽいけれども、甘い香りがした。ほんのりと浮かぶ、消臭剤の色。飴色に変わった天井の木目、うっすらとグレーに見えるクリーム色の壁紙、黒いラジカセも市松模様のベッドも、僕の居場所。この匂いと、家具と、両親と、思い出に包まれて成長した。頬につたう、あたたかい心の汗を感じながら、僕は準備をする。信じる

場所に向かうんだ。ここを離れて。きっと、こうなる瞬間を心のどこかで待っていた。

カチャリ、と僕の部屋のドアが開く音がする。振り向かずに、僕は、そっと汗を拭った。

「何してるの？」

「母さん・・・荷造りしてる。」

「分かった・・・母さんも行くわ。」

「はい？」

聞き間違えたか？

「母さんも行くの。」

嘘だろ。冗談言ってる場合じゃないぞ。

「母さんも一緒に行くわ。」

「ちょっと待って・・・どういうこと？」

「母さんも行くのよ。」

「いやいやいや、その発想は、いらなかったわ。」

面倒なことになった。母さんは、もう泣いていない。拳を握って、僕の目の前にたっていた。激しく面倒くさい。

「連れて行きなさい。」

真っすぐな母さんの目に射抜かれて、僕は動けない。さめざめと泣く母も、心も決めると強くなる。瞬きすらしない眼差しはナイフよりも鋭利な刃物だと思う。

「分かった・・・。」

僕の頬に流れていた汗は、すっかり乾いていた。

僕の家から歩いて15分くらいの場所に保ちゃんの家がある。昨夜は、とりあえず荷物をまとめ、親友の保ちゃんに連絡をした。まずは食料調達だ。保ちゃんなら何とか協力してくれるだろう。眩しい太陽を、いっぱい浴びながら、僕は保ちゃんのマンションのベランダを見上げた。白いシャツとチェック柄のパンツが揺れている。4階建てマンションの202号室。入り口から中に入ると、すぐ右側に塗装の剥げたエスカレーターがある。三角のボタンを人差し指で押すと、すぐに扉が開いた。202号室はエレベーターを降りてすぐ目の前。チャイムを鳴らさずに僕はドアを開けた。僕が来ることを知らせておけば、いつも鍵は開けておいてくれる。ドアを開けると、玄関前の部屋から保ちゃんが首を出した。

「入りなよー。」

保ちゃんのマンションはトイレと風呂場が一緒になっているが、小さなキッチンもあるし、悪くない。遊びに来るようになったばかりの頃は、1人暮らしでも、こんなに狭い部屋はイヤだな、と思ったものだが、学生の1人暮らしだ。これくらいで丁度良いのかもしれない。せんべいをかじっている保ちゃんの部屋は収納ボックスが、いくつもあり、服が脱ぎ散らかされているということは、まず無い。その割には、せんべいやポテトチップスのカスを床にこぼす癖があるが……。保ちゃんは、また1口、せんべいを、かじった。小指のつま先くらいの食べカスが持っていた雑誌の間に落ちる。ぐう、と鳴るお腹を僕は抑えた。

「大丈夫？少し顔色が良くないみたい。座りなよ。」

小さなガラスのテーブルを挟み、僕たちは向かい合って座った。パリ、と静かな部屋に保ちゃんの、せんべいの音が響く。心配そうに見つめる目と空腹感を腹一杯に感じながら、僕は口を開いた。

「あのさ、実はもう家に金も食べ物もなくて……。どうしたら良いんだろう。」

目を合わせられなくて、言い切ると同時に下を向いた。握りこぶしを、正座した両足の上で、さらに握る。伸びっぱなしの爪が手のひらに食い込んだ。

「とりあえず、せんべい食べなよ。」

醤油せんべいが今、僕に給仕される。かぶりつくように食べた。そして、むせた。

「お茶いれるから待ってなよ。食べカスこぼすなよ〜。ちょっと待っててね。」

唾液を分泌することに全神経を向けながら、息を整える。ちょっとだけ涙が出た。

「ごほっ……。ありがとうね、保ちゃん。」

2人で、お茶を飲みながら改めて話をする。

「家族で食べるものがなくなって、お母さんも友達のところの助けを求めにいったんだね。分かった。」

「僕は反貨幣制度グループに入って活動したいとも思ってる。お金について、ちょっと思うところがあってね。行動してみたいと思った。」

「それなら俺たちと来ると良い。以前に、ゆうちゃんに言ったか分からないけれど、実は俺は、そのグループと繋がってる。というか入っているのかな。暴力的なことは俺は、してない。その

グループの中でも、いくらか派閥みたいなものがあるから、どこかの派閥の人が、やっているのだと思う。俺達は主に宣伝、かな。どれだけ、お金に、いや、裏の権力者に支配されているかを伝えたりする宣伝。」

「保ちゃんは大方、行動派なんだね……。じゃあ、怖いグループじゃないんだね？暴力的なことは本当に、したくないから。それと……。食べ物や日用品を手に入れるには、どうしたら良いか、考えるのを助けて欲しいんだ。というより、それが1番重要だから、ここに来ただけどね。」

「大丈夫。グループ内に、お互いを助け合うシステムがあるんだ。お金を放棄すると同時に、政府に依存しない生活を整えるためのシステム作りをしている。世界中に、色んな人がいるからね。グループの協力者として。」

「それって、どういうシステムなんだい？」

うーん、と保ちゃんは、お茶を1口すすった。灰色の渋い湯のみから湯気がのぼっている。

「食べ物を作っている人は食べ物を他の人に、あげる。トイレットペーパーを作っている人がいれば、それを他の人に、あげる。料理をするのが得意なら、誰かのために作ってあげる。シンプルなシステムなんだ。誰もが、やりたいこと、やれることをする。何もしないから、何もできないからといっても、それは問題じゃない。やりたいことを、やりたいだけやる。それが大事なんだ。」

「やりたいことを、やりたいだけ……。何もしないやつは、いじめられないの？役立たずにならない？」

にこりと、白い笑みを浮かべて保ちゃんは言う。

「役立たずの人なんて、いないよ。」

「食べ物もない、トイレットペーパーもない、料理も出来ない、ただペラペラ話すだけの僕に何が出来る？障がい者だったら？病気だったら？ただの怠け者かもしれない。許される？そんな人が許される？」

ガラスのテーブル越し、保ちゃんが僕の方に身を乗り出して囁いた。

「障がい者だって無力じゃない。病人だって無力じゃない。やりたいことを、やるのが大事なんだ。怠け者に見える人でも、本人は心の中に葛藤があったり、打ち明けられない想いもある。それから、ゆうちゃん。」

なまめかしい声色で保ちゃんは、さらに続ける。上目遣いなのが妙に気になった。

「許す、許さないってのは自分の問題だよ。ゆうちゃんは自分を許せないんだろう？どうして自分を、そんなに責めるのかな。」

「そうだね……。自分を許せない。自分に価値がないように感じるんだ。きっと、だからだと思う。いつも何かしなきゃ、何か人のためにしなきゃ、そうやって、あせってる。」

熱くなる僕を保ちゃんは、じっと見つめる。背筋を伸ばして座りながら。そして、ゆっくりと、湯のみのふちを艶のある指先で、なぞった。空っぽの湯のみは、お茶を注がれているのを待っている。あんな風に口を開けているのは、いつも満たして欲しいから。

「価値はあるよ。保ちゃんの価値はある。ああ、でも、そんな考えは幻想だ。価値なんてもの

はね、人間が勝手に作り出したものだよ。大体さ、価値がなきゃ生きてちゃいけないのか？許されなきゃ生きていちゃいけないなんて、ばからしいだろう。」

言った横顔に、うっすらと影がさす。外は少しずつ暗くなってきた。開いたままのカーテン、干したままの洗濯物。

「帰りたくない。今日、泊まっても良い？」

保ちゃんは振り向いて笑う。

「勿論だよ。」

ちょっとだけ、僕は笑顔にキュンとした。

生みだしていく仲間

次の日、僕は保ちゃんと、彼の言う仲間の元へ行った。横浜の駅に近い小さな建物。空を覆い尽くす大きなビルの間、それはあった。薄っすらと濡れたコンクリートから、かすかに香る雨の匂い。

「見て。あそこでグループの人たちが集まっている。」

建物の前にある駐車場に車を止め、運転席から右側に建つ建物を指差し、保ちゃんが言った。頭を低くして、僕は指輪のはまった指の先を見る。ひび割れた、その白い建物の窓に人影が映った。人がいるんだ。当たり前のことかもしれないけれど、僕には少しだけ不思議なことに感じた。彼らは笑い、泣き、怒る。僕と同じように。そんな人たちが、この空間に存在しているのだ。なぜか僕は彼らと離れているように感じる。彼らを近くに感じられないのは、僕が彼らを感じられないからだと思う。すごく遠くを感じるよ。

「じゃ、案内するから。ついてきて。」

車を降りた僕たちは自動ドアを抜けて、建物の中に入った。

「こっちだ」

と僕の腕を掴み、保ちゃんは言う。

「待って。ゆっくり行こうよ。」

せかす保ちゃんの背中に投げかける。長髪頭が振り返り、目尻を緩めて笑った。僕の腕を掴んでいた冷たい手は、撫でるように下にさがり、今度は僕の手を握る。

「手冷たいね。」

「手が冷たい人は心が冷たいらしいよ。」

保ちゃんは建物内の、こじんまりとした部屋に連れて行ってくれた。パイプ椅子と長い木の机、高校の教室くらいの広さだ。さすがに黒板は無かったが、ホワイトボードが置いてある。

「お茶でもいれるよ。何か飲みたいものある？緑茶でも紅茶でも、はと麦茶とかもあるよ。」

「あ、じゃ紅茶。濃いめにしてね。」

給湯室に消える保ちゃんを見送ってから僕は1つ溜め息をついた。静かな部屋は、とても落ち着く。窓には水滴が沢山ついていて。もう1つ息をついて佇んでいると、遠くから足音がするのが聞こえる。人気のない廊下に響く足音。開け放したままのドアから1人の男の人が入ってきた。ドアの側で立ち止まり、あっという声とともに会釈をする。

「あっ、こんにちは。お客さんですか？生徒さんかな？」

「いいえ？生徒では、ありません。桐野保君と一緒に、ここに来ました。」

彼はまた、あっと言って、瞬きをした。

「それでは、彼が言っていた新しいメンバーとは君のことですね？はじめまして、僕は花岡と言います。どこから、いらっしゃったのですか？」

「はじめまして、篠田です。戸塚の方から来ました。花岡さんは、ここで、どんなことをしていらっしゃるのですか？」

黒いスーツを着た花岡さんは僕の隣のパイプ椅子に座った。瞳が大きくて綺麗な人だ。スーツの

カフスポタンが・・・ドクロなのが気になる。

「僕は、ここで先生をしています。ここが、どんな所か、保君には聞きました？グループのみんな建てた学校なんですよ～。」

「学校？」

「そうです。ここで、それぞれの分野のエキスパートが集まって、授業を行うのですよ。篠田さんも受けてみたらいかがですか？」

「え？良いんですか？」

「勿論、あなたはメンバーになるのですし、そもそもここはメンバーでない方にも無料で授業を行っていますよ。メンバー優先では、ありますがね。」

「ほおお・・・。」

「ご存知ありませんでしたか？」

「はい、保君からは全く聞いていません。メンバーの方が集まるということしか・・・。」
この花岡さんという人、香水の良い匂いがする。なんと言うか爽やかな香りだ。

「それなら！このこと、僕が沢山教えますよ！任せて下さいよ。」

意外と暑苦しい面のある男だ。

「おや、保君」

振り向くと、プレートの上に、お茶を乗せた保ちゃんがドアから入ってくる場所だった。

「あら、花岡さん、いたんですか。お茶は2人分しか、ありませんよ。どうします？」

「大丈夫だよ、保君。自分で、いれてくるから。2人で、お話していなよ。」

「ありがとうございます。」

僕の前の机に保ちゃんはカップのオシャレな紅茶を置いた。ピンクの薔薇が金のふちで囲まれているカップだ。

「それ可愛いカップでしょう。俺の家から持ってきたんだ。」

透き通った紅茶を見つめる。薄い陶器のカップのふちは熱かった。女の子は、きっと、こういう柄が好きなのだろうな。

「保ちゃんて、こんな乙女趣味だったっけ？」

「はは、どうかな。けど時々思うんだ。女の子だったら、自分は、どう生きてたかな、って。」

「女の子・・・だったら？」

首をかしげた僕を見て、保ちゃんは髪を掻き上げた。そういえば長い髪は女の子みたいだな。

「そうだねえ。女の自分で、どんな感じだろうって気になる。女の自分が好きなんだよね。というか自分が好き。自分の理想のタイプは自分だな。」

「女装とかするタイプ？」

「しちゃダメ？」

僕の隣で保ちゃんは覗き込むような体制で笑った。

「まあ、僕も、したい時あるけど。」

え？と、保ちゃんが呟いた時に花岡さんが帰ってきた。コーヒーの香りが部屋いっぱい満ちる。

「2人とも何やってるの？」

「何も。」

素早く保ちゃんが返答した。少しだけ頬が赤い。何か変なやつだな。

「ところで、篠田君だけど、これから、ここで、どうするか決めた方が良くない？何か得意なことは、ある？それから、どんな活動がしたいかも聞いておかなきゃね。」

そうだ、そのために来たのだ。

「僕、畑仕事を最近始めたんです。保ちゃんと。これから、それが役に立つようなことがしたいな。野菜が、本格的にできるまでは時間がかかるけれど、それじゃダメですか？頑張りますから。」

「大丈夫。それでいこうか。みんなで野菜をシェアしたりする感じですね。」

良かった。何とかかなりそうだ。革命的なことをしたり、銀行を爆破したりするわりには、ほんわかとしているところがあるんだな。受け入れてもらえているのかな。色々取りはからってかれている保ちゃんにも感謝だ。

今起こっていることは？

「情勢は、どうなった？」

「かなり良い。人々の意識が変わってきた。国民の70%くらいが金の支配を放棄してくれば国は、やっていけないだろう。鉄道関連の仕事でもストライキが起き始めてる。かなり時間を、かけた。」

「それは良かった。実のところ、支配しているのは、金じゃない。自分自身だな。1つのシステムに、こだわり、周りの流れにあわせて、自分は社会の中に閉じ込められていると考えている。社会を作っているのは自分自身だ。」

「その通りだな。多く人は周りのメディアにマインドコントロールをされ、あたかも自分はシステムの中の駒だと思われている、いや、自分が、その考えを受け入れているのかな。国民が気づいていけば、世界は変わる。それは俺達の集合意識のブロックの解放だ。」

迷彩のワンピースに黒のブーツを履いた彼を僕は見つめる。低い声だけが可憐な姿に不釣り合いだった。後ろに、まとめた黒い髪は腰まで達している。この会議を、まとめているのは彼だ。

「メディアの在り方を、そろそろ変えていく必要があると思う。最終的に言えば、結局のところ自分次第、自分の考えが世界に反映されるだけなのだが、そこに気づくまでは周りの情報というのは人々に大きな影響を与えるかもしれない。」

「そうだな、最終的に言えば。今までのような恐れを広げるような情報の在り方を変えるには楽しいもの、安らげるものを伝えていく必要がある。我々は、どんなものを与えていけるだろう。楽しいこと、安らげることねえ・・・。」

「楽しいものも良いが、勉強になるものも良いねー。しかも今までの学校が教えなかったようなものを教える。こんなこと学校で教えてくれなかった、と思うことあるだろう。例えば、恋愛の話とかね、はは。」

「はは、良いな。この世界のあり方についても教えていく必要が、あるかもしれない。まあ、そもそも今の金のあり方を、どうしようとしている、というのも幻想に、のまれたあり方だよな」

「はは、そうだな。やりたいからやる、の方針だ。金というシステムがあろうが、なかろうが、その方針からは外れないでいたいものだな。」

「やりたいからやる、ね。それが1番だよな。」

「やりたいからやる、与えたいから与える、受け取りたいから受け取る。自然に生きる動物達と同じように。」

「お前の姿も自然そのものか？」

そんなこと突っ込んで大丈夫なのかな？この人は。僕は長髪髭面のヒッピー男を見ながらハラハラしていた。絶対ギター弾いてピースとか言ってるぞ、この男。というか会議の女装リーダーといい、この男といい、どうなっているんだ。個性強すぎだろ。

「はは、そうだよ。素敵だろ？そのへんの女よりは綺麗な自信あるぞ？」

「素敵だね。俺の女になったら？」

笑いが部屋に広がる。会議に参加しているのは僕含め、4人だ。僕と女装リーダー、ヒッピー男、それから背の高い痩せた男が1人。

「馬鹿ね。あんたみたいな男、願ひ下げよ。」

こうしておけば良かった、ああしておけば良かった

お金を早く銀行から、おろしておけば、こんなに切羽詰まることは、なかったのかな。時々思う。僕は、こんな世界を予想出来なかったのかな、って。考えてみれば、お金を預けるって、すごく他人に命を預ける行為のような気もする。でも待てよ。よく考えてみればだ、他人に命を預ける行為は生まれてからずっと、しているぞ。僕は自分で畑を耕していたわけでもなかった、家だって元々建っていた。水も蛇口をひねれば出る。僕は何か食べたり、飲んだりしていれば、取りあえず生きていけるのだろうか？そんな生き方って意味があるのか？人は生きるために働く。けれども自分にとって楽しい仕事でない限り、彼らは幸せそうには見えない。時々、社会的な常識だと思っているものに忙殺されて、自分としての生き方を忘れてるように見える。

政府は今の状態に対して緊急の措置を取った。あの銀行爆破から僕たちは犯罪者団体として扱われ、1人1人取り調べられるようになったのだ。事件に関連した証拠が出ようものなら、お縄になる。犯罪というものも、ダメだという1つの思い込みに過ぎないが、やはり人が傷つくのは、いたたまれない。平和的な方法を、とにかく実践するに限る。そのために僕たちは無償で多くの人に来るだけのことをする。だが暴動自体は火がついたように各地で、どんどん起こっているようだ。メンバーから話を聞いた感じだと、どうも色んなことが政府に、でっち上げられたりして、犯罪とは無関係の者も濡れ衣を着せられたりしているようだ。学校のように使われているグループのアジトの方も、そろそろ警察の調査が入るかもしれない。ああ、父さん、母さん・・・僕が犯罪者だと思われてしまっても許して下さい。少しだけ、僕はグループに入ったことを後悔した。いや、最初から何となく、こうなることは分かっていた・・・。何かを犠牲にせず何かが入るなんてことは、ないよな？

お金を流通させるため、銀行は直接、格家庭に紙幣を届けるつもりだと言う。このグループにいる限り、メンバーには食料や日用品が支給されるので困ることは、ないのだが、グループの活動が行き届いていない場所にいる人は、きっと助かるだろう。とにかく人の力が必要なのだ。革命とは得てして、そういうものなのだと思う。人々が一致団結した時、物凄いパワーが生まれるのだ。そのためには、1人1人が自分の得意分野で活動することなのかも。

グループ内部の何人かは日本銀行も破壊しようとしている、と保ちゃんから聞いた。グループ内で派閥の違いがあるとは聞いたけれど、何やら極端すぎないか？現在のシステムを崩しながら、新たなシステムを構築する、といった流れを考えているようだが、うーん、暴力が平和的なものを生むとは僕は考えられない。世界全体のシステムを整える前に、内部の人間関係を整えた方がよい気もする。このままじゃ暴力対暴力の戦争状態だ。僕自身は何がしたいか、ここは忘れないようにしなきゃ。やりたいことを、やる。そうだ。何が起こっても、軸は、いつもそこだ。

多くのことが僕の周りで確実に変わってきている。輸入品は手に届かないと言っても過言ではないくらい高くなり、手に入らない。だが、それはスーパーなどで売っている話のものであり、僕らグループのメンバーは世界各地の拠点にいる仲間達を通じて輸入している。この運動が一体どこの国で、どうやって始まったのか、ということまでは僕は知らないが、人間やろうと思えば何でも出来るものなのかもしれない。自分で起こしたいと思って始めた革命が、このようにして

広がるのは、どんな気持ちだろう。怖いかな？それとも楽しい？嬉しい？両方かもしれない。ちょっとした水滸伝みたいな話だ。僕は・・・怖いと同時にワクワクしている部分もある。勿論、後悔している部分もあるけれど、僕は、やりたいことを、やっていると思うから。

息子に啖呵を切って出てきた。そうならもう母さんが、やるしかない。お父さんは完全にダメだわ。ママ友達を頼り、食料も工面した。けれども、このままだ家に帰って、のうのうとしたいとは思わない。出来ることを、社会のために出来ることをしたい。こここのところ、街の様子は変わった。お互いの持ち物を近所の人同士でシェアするようになった。求めている人がいれば与える。自然なこと。誰もが、そうなのね。ホームレスや犯罪者だって例外じゃない。人は誰かを支えることが出来る。もしかしたら、と思うことがある。私たちが困っている人たちに必要な物を与えていけば、この世界には飢える人が、いなくなるのではないか。ホームレスなんて、いなくなるんじゃない？ 飢えて死んでいく子供達も、いなくなるんじゃない？

お金が各家庭に直接配られる政策が、とられてから確かに少しは楽になった。けれども、それは、きっと一時的なものね。お金は、それぞれの人が稼いでいた額に関係なく平等に配られている。元々、お金持ちだった人は文句を言っているわ。世界が平らになっていくような気持ち。一方は裕福、一方は貧乏というものがない平らな世界。

「ねえ、篠田さん、今日は山下さんの家に行くんでしょう？ 自宅から近いんだっけ。良いじゃない。」

受話器から聞こえる牧村さんの声。高い声を響かせるように話すところが若いころと変わらない。

「そうそう、近行って良いわよ。あそこの美智子ちゃんは、ぐずらないし、楽なの。赤ちゃんて本当に可愛いわ。大きくなったら何をするか分からないけれどね。」

おほほ、と2人で笑いあう。そうだ、今日はベビーシッターの仕事がある。牧村さんに誘われて私もテレビで噂になっているグループに入ることにした。私が入ったなら、もう大丈夫ね。任せておきなさいって感じよ。そんなわけで今日はグループの活動として仕事をする。山下さんの家は近いので歩いていくけれど、グループのメンバーはバスやタクシーの代わりに無償で色んな人を車に乗せる、といった活動もしている。お父さんも無駄な仕事するくらいだったら少しは役に立って欲しいわ。

山下さんの家まで歩いて15分。美智子ちゃんのお母さんが仕事に行っている間に私が家事、子守りをする。雨が降りそうな曇り空。洗濯物が心配だわ。早足で美智子ちゃんの家に向かう。住宅街の中、美智子ちゃんの家は、ひときわ大きな一軒家（うちも一軒家良かったわ。安月給って嫌ね。）。今日はドアの前に美智子ちゃんママと警察官が2人いる。側にはパトカーも1台。ざわり、と胸に、痒い感覚が広がった。逃げた方が良いのかしら？ グループのメンバーの取り締まりが厳しいとか最近言うし。

「あっ、篠田さん。」

美智子ちゃんママの声に警察官たちが振り向く。とたんに動けなくなった。

「すみません、ちょっと良いですか？ ご存知かもしれませんが、最近は取り締まりが厳しくなっています。お話聞かせて下さい。」

腕を掴まれ、パトカーに乗せられる。窓の外は静かな住宅街。何人かが家の窓から、こちらを見

ていた。家の洗濯物も、干しっぱなしのまま。犯罪者は、きっとこんな気持ちになるのね。

僕の値段

<http://p.booklog.jp/book/105343>

著者：千秋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/chiaki666/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105343>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105343>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

どうして？

看守と母さんと僕。抑えられない怒りに震えながら、机の上の握りこぶしを見ていた。母さんの顔を、まともに見ることが出来ない。

「母さん、何で、こんなことに？」

しぼんだような母さんを前に、僕は声を絞り出した。痛いくらいに、体中に力が入る。

「御免なさい。母さんにも分からないの。ベビーシッターの仕事をする日、警察の人に連れてこられたのよ。」

弱々しい声は僕の耳に、かろうじて入るほどだった。

「許せないよ……。」

留置場を出て見上げた空は透き通っていて、僕は影になったようだった。這いつくばって、上を見上げる影。はかない体は夜になれば消えてしまう。僕は歩き続けた。伸びた前髪が風に泳いで目に刺さる。グループのメンバーが集まる場所へ行く。お金がないので誰かの車に乗せてもらわなくては。無償で乗せてくれるメンバーの車には、助手席の前の窓の側に「無償タクシー」と書かれた紙が貼られている。探してみれば、結構、街には沢山ある。本当に助かる。でも今は胃が焼けそうなくらい、怒りで僕は燃えている。1台の車に手を振り、乗せてくれるよう、お願いした。

「お兄さん、どこまで行くの？え？横浜の拠点？そうかい。」

恰幅の良いおじさんが乗せてくれた。疲れたな。

「メンバーの人かい？」

「そうです。何か？」

「いや、ずいぶんイライラしているみたいだな。どうした？メンバーなら仲間だろ。どうだい？おじさんに話してみないか？」

多くを話したら、泣いてしまいそうな気がした。

「いや、聞かないで。」

母さんが捕まったなんて。あり得ない。何があったのだろう。

横浜の拠点。僕は、ずかずかと建物の中に入った。

「どうしましたか？」

受付からすぐの小さなラウンジ。コーヒーを片手に花岡さんが僕を引きとめる。

「母が大変なんです。花岡さん知っていますか？母が捕まったんです。これって、おかしいでしょう！何もしていないのですよ？暴動にだって参加していない！どうかしてる！！」

早口で、まくしたてた。抑えていたものが一気に吹き出てくる。

「落ち着いて下さい、篠田さん。落ち着いて。ゆっくり説明して下さい。お母様が捕まったのですか？」

ふうふうと呼吸を整える。

「はい。」

「お母様は何もしていないのですね？」

「はい！」

コーヒーを飲んで、花岡さんは横をむく。それから、遠くを見て息をついた。

「こういう事態は最近では、あまり珍しくないのです。」

「え？ どういうことですか？」

「ですから」

はあ、と花岡さんは息をついた。ドクロの総柄ネクタイの首もとを緩める。

「よくあることなのです、最近では。何かと、いちゃもんを付けてメンバーを拘束するのですよ。篠田さん、世の中はクリーンなことばかりだとは思わないで下さい。確かに、お母様が心配なのは、よく分かります。」

何だと？ そうか、そうだった・・・そんな話を聞いたことがある。でたらめなことを、でっち上げ、メンバーを捕らえる。

「まさか、母さんが、こんなことに、なるなんて・・・グループでは、こういうことに関して何か、対策を行っているのですか？」

「残念ながら、あまり色んなことは出来ていませんね。取引することでしょうか。相手が要求してくるものを受け入れる。それはグループ単位であることもあるし、個人単位であることもあります。時と場合によって要求は違うので、一言に、こうこうだとは言えませんね。」

「そんな・・・なら僕は、どうすれば？」

うーん、と花岡さんは腕組みをした。祈る気持ちで僕は彼を見つめる。

「お金ではないものが解決します。あなたは、それが何か分かりますか？」

僕は首を傾げる。

「それはね、誠意です。」

広い家

1週間ぶりくらいに我が家に帰ってきた。朝の十時半。

「父さん。」

両親の寝室の姿見の前に父さんは立っていた。黒いスーツの上着を羽織る。寝室のタンスは、ごった返しだ。嫁入りする時に実家から母が持ってきたというタンス。木で出来ていて、取っ手の上にネコのステッカーが貼付けられている。ベッドの上はパンツやハンカチで散らばっていた。

「こんなに散らかしちゃって・・・。」

「仕方ないだろう。母さんが、いないんだから。」

キッチンはコンビニの弁当やカップ麺の容器で溢れている。男の部屋って感じだ。これは母さん、父さんよりも先に死ねないな。僕だって、ここまでは、ならないはずだ。

「酷い部屋。」

「仕方ないだろう。母さんが、いないんだから。お前は、ちゃんと、やってるのか？」

ベッドの足下に置いてあった革の鞆を手に取りながら父さんが言った。

「やってるよ。保ちゃんの家に行ったり、メンバーの家に行ったり。」

「そうか、お前は大丈夫そうだな。保君に、宜しくな。」

父さんは歩き出す。目の下のクマが酷い。いつもより疲れた感じの背中小さくて、けれども、しっかりとしていた。肩に大きめのホコリが乗っているのは見ないことにする。

「行ってくる。」

「ちょっと待った。どこに行くの？」

「母さんを助けにだ。」

ボタン、とドアが閉まる。時が止まったような気がして、僕は1分間動けなかった。外でカラスが、かあと鳴く声が聞こえる。

スクリーンの父

「おい、篠田君。テレビを見てくれたまえ。地元のテレビ局ね。」

携帯電話から響く低い声に耳を傾けた。

「女装隊長？どうしたんですか？」

テレビが何だというのだ？とりあえず言われるままに、3チャンネルのボタンを押す。

「警察は事実を、ねつ造しています。私は反貨幣制度グループの人間では、ありませんが、妻が捕まった以上、黙ってはいられません。警察はグループの人間を、これといった証拠もなく捕まえているのです。」

カメラを真っすぐに見据えてマイクに話す父さんが、そこにいた。普段のふぬけ様は、どこにも見当たらない。本気を出したのか？やる気スイッチが入ったのか？

シャッターの音が、けたたましく鳴り続ける。フラッシュが眩しい。

「今まで見てみぬふりをしていただけで、きっと、このようなことは前から行われてきたのでしょう。秩序に従う者が支配される現実です。」

ぐいぐいと目をこする父さん。涙声になりながらも訴える父さんを見ながら、僕は呼吸の仕方も忘れていく。

「どうか妻を助けて下さい。みなさん、立ち上がりましょう。もう国の体制に依存するのは、やめましょう。それは私たちを救うためのものではありません。搾取し、支配するためのものです。どこか、心のどこかで気づいているのでは、ないでしょうか？それでも流されてきたのでは、ありませんか？誰もが協力していかないと、世界は変わりません。自分が変わらなければ、見る世界は変わらないのです。どんな世界に住みたいのか、考えてみて下さい。私は私の道を歩みます。あなた方が最高最善の道を歩むことが出来るように祈りながら。」

ひとつ、お辞儀をして会見は終了した。僕は長い息をつく。目が少し乾いていた。

「もしもし、篠田君？」

黒い携帯電話から聞こえる声に、はっ、と驚いてしまった。隊長と通話中であることを、すっかり忘れていたぞ。

「あ・・・女装隊長・・・ええと、何ですかこれは？どういうことですか？一体何が？あれは、どう見ても父なのですが？」

「どうやら、行動に移したようだね。彼みたいな人がグループに入ってくると良いのだが（笑）」

「いや、（笑）じゃなくて・・・。」

「そうかい？まあ、お父さんに、宜しくね。」

戸惑う僕を完全に無視して、隊長は電話を切った。もうちょっと優しくしてくれても良いのに。さて、どうしよう・・・。父さんを待ってみるか・・・。どうせ帰ってくるだろうし。疲れた。一眠りしよう。立ち上がり、自分の部屋へ向かった。足の裏が汗でベトベトしている。あの日、出て行った部屋。また戻ってきてしまった。カーテンは綺麗に、まとめられたまま。布団は皺のないまま。うっすらと、机の上あたりにホコリが乗っていることくらいだと思う。あの日と違う

のは。

次の日の朝、父さんは帰ってきた。玄関の鍵を開ける音で僕は飛び起きる。

「父さん！何やってたんだよ！びっくりしたんだからな！テレビみて・・・メンバーの人が教えてくれたから・・・。」

歩きながら叫んだ。ゆっくりと、父さんは革靴を脱ぐ。

「ごめん、ごめん。でも仕方が無いだろう。こんな状況だ。お前も覚悟しておきなさい。」

「父さん・・・。」

僕の横を歩いて通って、キッチンへと歩いて行く背中を見つめた。白い棚から鉄のやかんを取り出し、火にかける。

「別に驚くことじゃない。遅かれ早かれ、こうなったさ。お前が行動したように、父さんも行動したんだよ。俺はグループのメンバーには、ならないと思うが、この地球に生まれたからには、自分の使命だと思うことを全うしたいのさ。今までの俺は、そんなことは考えなかったと思う。人は生まれて、働いて、病気になって死ぬ。そんな人生を当たり前だと思ってきた。だが、それは単なる思い込みに過ぎないんだ。死ぬことが怖くて、働いてきた。働かなくては生きていけないと思っていたからだ。だが使命を全うせずに死ぬことの方が、虚しい気もする。俺はロボットじゃない。」

インスタントコーヒーの粉を、スプーンでカップに入れる。カップのふちに、小さなスプーンが当たって、ちりと音をたてた。

「父さん、変わったね。」

「お前もな。」

「どうするの？」

「きっと、これからやることは、お前がやることと、そんなに変わらないと思う。自分を盲目にしていたのは、自分なのだということを伝えていくさ。」

「そっか。」

洗っておいたまま、拭かずにキッチンの籠に置きっぱなしにしていた白いカップを僕は手に取った。やかんを火にかける。それから、冷蔵庫にある牛乳を取り出した。

「何かを、やり遂げるために、必ずしもグループで動くことに、こだわる必要はないと思うぞ。結局のところ1人1人の意識の問題だからな。ちゃあんと1人1人が自分の役割を知って、生きていけば、自分も周りも輝くことになる。そうやって世界が変わるんだろう。」

カップの中のコーヒーが砂糖、牛乳と混ざり合って、茶色になった。全てが調和して、甘い、甘い、ハーモニーを生み出すのだ・・・。支配、というこの世界でも調和が起こっている。支配する人間、支配される人間。お互いがいて、世界は成り立っているのだ。けれども、支配されることを、やめられたら？そうしたら支配する人間は、いなくなるのだ。

「どうして人は支配されるの？」

「それはな、人には生きていたいという想いがあるからだよ。生きていたいとは死にたくないということだ。支配されている間は少なくとも生きていられると思っているのだろう。安全な秩序

の中で。」

何を選ぶ？

～昼下がりの会議室。僕とヒッピー男～

「お前は自分が支配されていると思うか？」

「え？どうでしょう。うーん・・・そうだと思います。僕は、多くのことを、この世界のシステムのせいにしていきますから。頭では、自分自身で自分を支配していることは分かっているのですが・・・あ、自分を支配していると自分で言いましたね。どうやら支配されているようです。」

「はは、正直じゃねえか。そうだな。この世界のシステムのせいにしてしまう。それは自分の主導権を相手に受け渡すことだ。」

「相手のせいにしてしまう、ということですね。」

「そうだ、それは自分の中にある多くのことを隠しちまうんだよな。」

「相手のせいにするによって、自分の中にある思いから目を逸らすことが出来ますものね。」

「だな、と言って彼は上を見つめる。」

「全ての現象は自分で起こしている。俺たちは潜在意識で繋がっているんだ。空が青いのも、ポストが赤いのも自分のせいだ。自分で創り出している。これに気づかないと成長出来ない。」

「潜在意識？」

「人の頭で考えられる部分のことを顕在意識という、考えられない部分が潜在意識だ。自分の潜在意識は他人の潜在意識と繋がっていて、その潜在意識も、また違う人と繋がっていて・・・木や花、空、地球の意識とも繋がっている。だから、どんなことでも起こせるんだ。潜在意識の中で望んでいることは実現する。引き寄せの法則なんかには詳しい人は、よーく知っていると思うがね。」

「どんなことでも起こせるなら、この支配する・支配されるの関係は僕たちが創り出しているんだ。」

「そういうことになるね。」

「それなら支配する・支配されるの関係を手放すためには、どうしたら良いのだろう。」

「手放し方っていうのは色々あるんじゃないかな。ただ道のりは人によって違うだろう。だが究極的に言えば・・・」

「言えば？」

彼は長い髪を、ぱさりと背中に流す。白檀の香りが、ふわりと漂った。

「究極的に言えば、支配が幻想であることに気づくことだよ。」

「みんな気づくことが出来るかな？」

「楽になりたいのなら、最終的に、そこに向かうんじゃないかな？」

「世界は変わる？」

「本当に望むならな。」

木枯らしが強く窓を叩いた。雪が、ちらついているのが見える。天使の羽が落ちてくるとしたら

、こんな風に見えるのかもしれない。